

## 第4回夏休みにみんなで作る安全安心マップコンテストの成果と今後の課題

赤石 直美\*・塚本 章宏\*\*・花岡 和聖\*\*\*・村中 亮夫\*\*\*・吉越 昭久\*\*\*\*

## I. はじめに

立命館大学歴史都市防災研究センターでは、小学生を対象として地域の安全安心マップコンテストを2007年より実施してきた<sup>1)</sup>。本稿の目的は、第4回となる2010年度のコンテストの概要とその成果を報告するとともに、子供たちとその保護者が安全安心に関するマップを作成することの意義について検討することである。

防災や防犯など安全安心に対する関心が高まるなか、それを地図で表現する試みが学校教育を問わず地域の自治体やNPOなど様々な立場から行われている<sup>2)</sup>。こうした試みの特徴は、行政や関係機関、あるいは専門家が一方的に防災や安全安心に関するマップを作成するのではなく、地域住民が主体となり独自の地域調査から、オリジナルのマップを作成するところにある。住民自身で学区内や町内における災害や犯罪、交通事故などの危険箇所を把握することは、危険性認識の向上や情報共有を促進させるよい契機となると考える<sup>3)</sup>。

立命館大学歴史都市防災研究センターは、文化遺産防災を核とした、専門家による研究の推進のみならず、住民と連携し地域防災力の向上を目指している。そこで、当センターでは小学生とその保護者を対象とし、「地域の安全安心マップコンテスト」を企画してきた。コンテストを通じて、小学生とその保護者あるいは地域の大人たち自身がマップ作成に取り組む機会をもち、地域の安全安心に対する認識を向上させたいと考える。その際、子供と大人とでは空間に対する認識の仕方が異なることをふまえ、子供と大人が共同で調査し、マップ作成に取り組むことを条件とした。互いに情報共有を図ることで、犯罪や災害への認識がより深まると考えられる。

## II. 事業概要

## 1 応募資格

安全安心マップコンテストへの応募資格は、小学生の個人またはグループとした。これまで応募の事例はないが、国内に限らず、海外からの応募も受け付けている。ただし、先述したような目的から、作業中の安全やコンテストの趣旨から、いずれの場合にも20歳以上の大人が1名以上付き添うこととしている。

## 2 課題内容

本コンテストの課題は、小学校の夏休み期間を利用して、居住地周辺や通学路といった身近な地域の安全安心に関するマップを作成することとした。地震や洪水などの自然災害発生時の避難経路・場所や通学時の交通安全、子どもの遊び場の安全安心、子ども／大人からみたヒヤリハットマップといったテーマの事例を示しつつも、地域の安全安心に関する内容であればテーマは自由とした。ただし、作成したマップには、具体的なタイトルを付記してもらった。対象とする地域のスケールは自由としたが、展示の都合上、作品の大きさはA0サイズ(841mm×1189mm)以内とした。その際、1枚の模造紙や画用紙に限らず、冊子状でも可とした。

## 3 実施期間

第4回マップコンテストの募集期間は、2010年8月25日(水)～9月30日(木)までとした。小学生と保護者が夏休み期間を利用して地図の作成に取り組めるように、また夏休みの課題として学校に提出された作品でもコンテストに応募できるように配慮した。

## 4 関連機関との連携

第4回コンテストは、社団法人地理情報システム学会との共催とし、世の中の様々な情報を表現する手法を研究してきた専門家とともに、「子どもの安全・安心」について理解を深められるよう試みた。その他、コカ・コーラウエスト株式会社、京都新聞社、京都市消防局、財団法人京都市景観・まちづくりセンター、人文地理学会、

\* 立命館大学衣笠総合研究機構

\*\* 日本学術振興会・特別研究員

\*\*\* 立命館大学文学部

\*\*\*\* 立命館大学歴史都市防災研究センター・副センター長

立命館地理学会、NPO 災害から文化財を守る会からの後援を得た。

また、第4回では、京都市内の京都市立洛中小学校、京都教育大学附属京都小学校においてマップ作成の講習を実施した。

京都市立洛中小学校では3、4年生計46人を対象とし、1回の授業で「安全安心マップとは何か」、「地域調査の方法」、「マップの作成方法」について説明を行った。その後、洛中小学校では、3、4年生の夏休みの課題としてマップの作成が取り入れられた。それらの成果は、コンテストにも積極的に応募され、多数の力作があった。

京都教育大学附属京都小学校では3年生90名を対象とし、社会科の「町歩き」授業の一環としてマップの作成が取り組まれた。そこでは、「安全安心マップとは何か」、「学校周辺のフィールドワーク」、「マップ作成」、「マップの公表」の計4回の講習が行われた。それらの講習では、当センターに関係する教員や研究員をはじめ、小学校の諸先生方、あるいは教育実習生の理解と協力を得た。児童たちはいくつかの班に分かれ、厳しい暑さのなかフィールドワークを行い、調べた内容をもとに模造紙2枚分の大きさのマップを作成した。その結果、個性あふれるマップが多数作成された。最後に、作成したマップについて、児童たちが班ごとに分かれて発表した。第4回での小学校におけるこれら講習の成果と課題は、今後のコンテストに活かしたいと考える。

### Ⅲ. 実施結果

#### 1 応募総数

第4回コンテストでは、京都市内をはじめ千葉県、東京都、愛知県などから応募があり、応募総数は96点であった。

#### 2 審査方法・結果

応募作品は、2010年10月6日に防災やまちづくりに関心をもつ9名の専門家によって厳正に審査された。今回は地理情報システム学会との共催ということもあり、学会より1名審査委員会に参加いただいた。その結果、地理情報システム学会賞、コカコーラ特別賞を含む、第1表に示された12作品が選ばれた。詳細な内訳は、最優秀賞1点、優秀賞1点、入選3点、佳作5点、地理情報システム学会特別賞1点、コカコーラ特別賞1点であった(写真1)。

#### 3 表彰式・作品展示

表彰式は2010年10月23日に立命館大学創始館ならびに同歴史都市防災研究センターにおいて行われた(写真2)。今回の表彰式は、地理情報システム学会大会シンポジウムとの同時開催とされ、貴重講演の前に行われた。入賞した作品および作品の一部は、立命館大学歴史都市防災研究センターの展示室において、2010年10月23日～12月24日まで展示された。

第1表 受賞作品リスト

受賞内容	学年	応募形式	タイトル
最優秀賞	3	個人	安心安全マップ&町調べ
優秀賞	2	個人	お地藏さまといっしょ！御所西安心安全マップ
入選	4	個人	洛中安心安全MAP
入選	6	団体	安全100%マップ上高野
入選	3	個人	家から学校までの安全マップ
佳作	3	個人	ぼくのと歩帰たくけいろと家のまわりのぼうさいマップ
佳作	6	団体	西尾安全MAP～西尾小学校周辺～
佳作	3	個人	草津駅周辺安全マップ！
佳作	4	団体	地域安全マップ(ふじき野1～3丁目)
佳作	4	個人	地域安全マップ
地理情報システム学会特別賞	3	団体	ぼくたちの安心な町マップ
コカ・コーラ特別賞	6	団体	上高野安全マップ



写真1 受賞作品

左「最優秀賞」 右「優秀賞」



写真2 表彰式の模様

#### IV. 安全安心マップ作成の意義

コンテスト応募に際し、地域の安全安心マップ作成に関するアンケート調査票の添付を求めたところ、44件を回収した（回収率46%）。本章では、その内容の分析結果を記すことで、子供と保護者すなわち周囲の大人たちが安全安心マップを作成する意義について検討したい。

##### 1 回答者の属性

回答者である保護者の属性は、20代が4.5%、30代が50%、40代が43.2%、50代が2.3%であり、そのうち82.2%が女性であった。今回、マップ作成の講習を行ったのが京都市内の小学校であったこともあり、回答者はほとんど京都市内在住であった。

##### 2 安全安心に対する関心

マップ作成に際し、小学生とその保護者たちは身近な安全安心についてどのような点に関心を持っていたのか、またマップを作成した結果、安全安心への考え方についてどのような変化がみられたのかを述べたい。

まず、マップを作成するうえで、どのような災害やリスクの情報を掲載することが重要かという問いに対しては、「交通事故」を選択した回答が多く、次いで「子ども110番の家」、「声かけ・不審者」、「非難場所」、「交番・消防署」であった<sup>4)</sup>。自然災害による危険性よりも日常的に起こりやすい事項が選ばれていた。

では、マップの作成を通じて、地域の安全安心に対する関心が高まったのかどうか。まず保護者からみて子供たちの関心が「とても高まった」と思うが、27.3%、「や

や高まった」と思うが63.6%であった。保護者自身の場合は、「とても高まった」が29.5%、「やや高まった」が61.4%と、マップの作成を通じて子供も保護者も身近な安全安心への関心が高まったといえる。すなわち、マップの作成は地域の安全安心への関心を深める有効な手段の一つとなると指摘できる。

ただし、子供と保護者とでは、安全安心について認識の違いがあったことが確認された。自由記述から具体的な事例を挙げると、次のような回答である。

- ・子供自身に危険についての知識が少ないと思います (30代女性)
- ・子どもたちは、自分の住む町を安全だと思い込んでいたところがあった (20代女性)

上記の2例は、安全安心ということ自体に認識が少ないことを指摘している。また、詳細に認識の違いを述べた回答も見受けられた。

- ・安全に関することで目に見える物（ガードレール等）は子供にもみつけられるが、危険な部分は子供には目につきにくい感じました (50代男性)
- ・子は通学路を中心に考えていました。（学区内でよく歩くといえば、やはり通学路になります）親としてはやはり交通のにぎやかなところが気になりました (40代女性)
- ・子供110番の家など、安全と書かれているとそれだけでその場所が完全に安全だと思ひ込むようで、子供の安全への認識の持たせ方は難しいと感じました (30代男性)

一方、小学生でもある程度地域の安全安心について認識を持っていたという指摘もあった。

- ・認識の違いはない。むしろ3年生の子どもたちでも安全や地域についてしっかりと考えることができ、感心した (40代女性)

以上のように、マップの作成から、保護者は子供たちの身近な安全安心に関する認識が少ないことを感じ取り、この機会を通じて認識の低かった小学生でも安全安心への関心を高めることができていた。

### 3 地域の安全安心への取り組みについて

地域の安全安心を守る上で、今後どのような取り組みが重要だかという質問については、「住民同士のあいさつ」を選択した回答が多く、その他、「警察官による巡回」、「地域内での情報の共有」、「学校での防災・防犯教育」、「家庭での防災・防犯教育」が選ばれていた<sup>5)</sup>。家庭、地域、学校と様々なレベルで安全安心への関心を深める必要性が指摘されつつも、挨拶を交わすといった日々の生活における基本的な行動こそが、自然災害時や日常の防犯につながる重要事項として選択されていた。言いかえると、挨拶が日常的でなくなっていること、近所との交流が減り希薄な地域社会となっていることが読み取れた。

### 4 マップ作成の意義

マップ作成の意義について、「地域の危険な個所を再確認できる」「防犯に対して認識を高めることができる」という回答に加え、「地域そのものを再確認できる」という回答が多かった。安全安心面だけではなく、居住する地域自体を再認識できるという意味でも、マップの作成は肯定的に捉えられていた。さらに、次のような例を挙げておきたい。

- ・安全マップを作ることで親子で安全について、真剣に話し合うことができること (30代男性)

近年、子供の虐待の増加が問題となっているなか、このように、マップの作成が親子間での会話につながることを指摘する意見がみられた。

- ・子どもたちが安全な町にしよう自分たちで地域に目を向け考えることが大切。それが将来の住民意識や地域への愛着につながる (40代女性)

単なる地域の再認識だけではなく、大人たちも含め、子供たち自身が地域に溶け込んでいく契機となると指摘する意見があった。

一方、マップ作成の課題に対しては、対象とする範囲の問題や記載する情報の絞り方が難しい点、やはり大人と同伴で作成する必要があるといった、マップ作成そのものについての意見があった。その他では次のような意見が見受けられた。

- ・安全安心マップで「安全域」だからと思って、気をつけなくて横着になってしまわないか心配（30代女性）
- ・一回作ったら安全安心な気持ちになるので、年に一回の見直しや追加が必要だと思う（40代女性）

これらでは、マップの更新を必要とすることが指摘されている。

以上、アンケートの結果から、子供と保護者で安全安心マップを作成することが、子供も周囲の大人も、地域の防犯・防災に関する関心を高める有益な機会となっていた。さらに、親子間での安全安心の枠を超えて、身近な地域そのものへの認識、地域社会で求められる日常的な規範といった、地域のあり方にまで関心が及んでいることがわかった。ただし、一度マップを作成することで安心してしまうのではなく、情報を更新していく必要性が再確認された。

## V. おわりに

本稿は、2010年度に立命館大学歴史都市防災研究センター主催で実施された「夏休みにみんなでつくる第4回地域の安全安心マップコンテスト」の事業概要を整理し、応募者へのアンケート結果からマップ作成の意義と課題について検討した。その結果は次のようにまとめられる。

①海外を含め全国を対象とした第4回コンテストへの応募総数は、96点であった。厳正な審査の結果、最優秀賞1点、優秀賞1点、入選3点、佳作5点、地理情報システム学会特別賞1点、コココーラ特別賞1点が選ばれた。

②応募者へのアンケートの結果から、マップの作成によって、子供と保護者は安全安心への関心を高めていたことが分かった。よって、本コンテストは地域の安全安心への関心を深める機会として効果があることがわかった。ただし、安全安心に関して子供と大人とでは認識の違いがあることも認められた。

③マップ作成の意義について、アンケートの自由記述の回答によると、地域の安全安心について認識できるこ

とはもとより、身近な地域を再認識できることを評価する意見が多かった。さらに、地域の防災や防犯に必要なこととして住民同士の挨拶を選択した回答が多く、自らが地域社会そのものを改善していく必要性を述べた意見も見受けられた。すなわち、安全安心をテーマとしたマップの作成が、近年希薄となってしまった地域社会のあり方まで再確認する機会となる可能性がみえた。

第4回のマップコンテストは、これまで以上に小学校の諸先生方の協力を得ることができ、その結果、子供たちや保護者を中心とした周囲の大人たちの安全安心に対する関心を深める効果が得られた。しかしながら、マップの更新方法など依然として課題は多く残されており、今後もそれらの改善を踏まえた事業の継続が求められる。そのなかで、安全安心をはじめ、地域社会そのものの改善につながっていくことが期待される<sup>6)</sup>。

【付記】本事業は、立命館大学歴史都市防災研究センター主催の事業として、文部科学省グローバルCOEプログラム「歴史都市を守る「文化遺産防災学」推進拠点」（代表：大窪健之）、ならびに立命館創始140年・学園創立110周年記念・APU開学10周年記念事業に基づく援助を受けた。

## 注

- 1) 第1回～第3回までのマップコンテストの事業概要については、歴史災害研究9～11号においてそれぞれ報告されている。
- 2) 防災に対する地域の取り組みを紹介、あるいは評価する場として、「防災教育チャレンジプラン」（URL：<http://www.bosai-study.net/top.html>（最終閲覧 2011年1月21日））という事業がある。そこでは多くの学校、団体が防災教育に取り組み、そのなかで防災マップの作成に取り組む事例がみられる。
- 3) 大友 充・渋谷 純一・佐藤 健「手作り防災マップによる地域防災力強化に関する研究」、日本建築学会東北支部研究報告集（計画系）65、2002、201～204頁。
- 4) 選択肢は「火事」、「地震」、「大雨・台風」、「豪雪」、「ひったくり」、「声かけ・不審者」、「交通事故」、「転倒危険」、「避難場所」、「交番・消防署」、「子ども110番の家」、「その他（自由記述）」の12件で、そのうち3つを選択することとした。
- 5) 選択肢は「住民同士のあいさつ」、「地域内の清掃」、「住民によるパトロール」、「警察官による巡回」、「地域内での情報の共有」、「学校での防災・防犯教育」、「家庭での防犯・防災教育」、「集団登校・下校」、「防犯関連グッズの携帯（児童向け）」、「防災訓練への参加」、「家庭での防災グッズの常備」、「その他（自由記述）」の12件で、そのうち3つを選択することとした。
- 6) 渡辺千明「結果防災のまちづくりに関する研究」学術講演梗概集 F-1（都市計画、建築経済・住宅問題）、2007、343～344頁、同「秋田県能代市における結果防災のまちづくり」学術講演梗概集 F-1（都市計画、建築経済・住宅問題）、2008、355～356頁。